



ボランティア

The Volunteers

の

本

水戸芸術館
現代美術センター
2004



水戸芸術館は音楽・演劇・美術の3部門を合わせ持つ複合文化施設として、1990年に開館、今年で14年目を迎えます。美術部門にあたる現代美術センターでは、開館当時から現代美術を中心に独自の企画展や関連事業によって国内外から多くの来館者を迎えてきました。しかし、一方では地域の方々に多様化する現在進行形の美術表現を紹介し、理解を広げることの難しさとともに歩んできたことも事実です。

そのような中、市民と美術館をつなぐために発足したボランティア活動もすでに11年目を迎えました。度重なる名称変更や1年の活動休止など、活動はけっして順風満帆ではありませんでした。しかしスタッフも含め、迷いながらも個人のあり方を互いに認めあい、小さなつながりを積み重ねてきたことによって、今やさまざまな側面から現代美術センターの活動を支え、広げるために、そして、地域と美術館の関係を考える上でも欠かすことのできない存在となりました。

本冊子では2004年春、今現在の活動状況を紹介します。後ろ向きな形容詞ばかりがつくこの時代に、美術館で出会う多様な価値感に救われ、(ときに戸惑い)励まされ、さらにその喜びを多くの方と共有しようとするボランティアの皆さんの姿は、現代美術と普通の暮らしとが、けっしてかけ離れたものではないことをどんなテキストよりも雄弁に語ってくれることでしょう。

市民の方々にはギャラリーに足を運んでいただくきっかけに、また市民のボランティア活動に関心がある方には公立美術館の活動の一例としてこの小冊子をご活用いただければと思っております。



ボランティアの本
水戸芸術館現代美術センター 2004

目次

CACギャラリートーカー

ウィークエンド・ギャラリートーク 6

託児付きギャラリートーク 8

学校との連携 10

募集・研修 11

自主企画・館への提案例 12

プロジェクトボランティア

展覧会展示制作 14

高校生ウィーク 16

ワークショップ 20

ギャラリーライター 22

司書ボランティア

蔵書の整理 24

広報ボランティア

チラシ・ポスター配布 25

メーリングリスト管理人「水戸芸術館現代美術ファンクラブ」

現代美術センターファンクラブの運営 26

今後の展望

かわりのグラデーション 27

ウィークエンド！ ギャラリートーク



2004「YES オノ・ヨーコ」展

「現代美術センターボランティア」のなかでも、1992年（*1）から実施されてきたギャラリートークは、最も初期から行われてきた代表的活動のひとつです。

ギャラリートークを行うボランティアは、「CACギャラリートーカー」（*2）と呼ばれます。作品の解説者ではなく、来館者と対話し、また参加者同士の意見交換も促しながら、共に現代美術の楽しみ方を探っていく、そんな役割を期待して、彼らをこう呼ぶことになりました。

現在活動しているギャラリートーカーは22人。20代から70代まで、また主婦、会社員、教師など多様なメンバーにより、週末のギャラリートークが開催されています。現在までに計4回行われたメンバーの募集においては、現代美術に関心のあることはもちろん、来館者と距離感の近いコミュニケーションを図れる能力が重視されてきました。日々、美術に関わる業務に従事する館内スタッフにはかえって得難い資質や存在感、それがギャラリートーカーに求められているとも言えるでしょう。

現代美術は、作品の多様な解釈が成り立つ点が魅力でもあります。作品の背景を知る「解説」については、作家自身や専門家による講演などが鑑賞の大きな助けになるのは確かでしょう。一方、作品の前に「私はこう感じる」という個々の自由な「体験」



2002「日常茶飯美—Beautiful Life?」展



2004「Living Together is Easy」展



2001「川俣正 デイリーニュース」展

「クロード・レヴェック」展
ギャラリートークに参加しての感想—アンケートより

◆今回ギャラリートークに初めて参加しました。
美術館はお話してはダメ！という印象がありました。ですが、それが無く、色々な質問に快く答えて下さりとても良かったです。現代アートは難しいものですが、車の映像には最近出産した事、産む直前の出来事等を

思い出しました。（こんな感じ方でよいのかな？）または是非参加したいと思います。トーカーさんありがとうございます。（茨城県 / 女性 / 35歳）

◆ただ見ていたら（ひとり）で通りすぎてしまったことも、ギャラリートーカーの方や、他の方と一緒に話をしながら見ていると気が付くことが多く、何倍も楽しめました。現代アートを見直すいい機会になりました

をサポートするために、ギャラリートークがありません。もちろん、各ギャラリートーカーは各展示に関して熱心に勉強もしています。しかし、彼らの力が最も発揮されるのは、むしろ作品の前に生じる「これは何だろう？」という純粋な想いや、「何て○○なんだろう！」という驚きを参加者と共有する瞬間であり、こうした能動的な鑑賞体験へと緩やかに導く案内人としての期待が寄せられています。そこで求められる役割は美術専門家の代理ではなく、むしろ「美術好きの隣人」とも言うべき存在ではないかと考えられます。

*1当時の名称は「美術教育ボランティア」
*2CAC# Contemporary Art Center G略

た。またこうした機会がありましたら参加したいです。音の芸術もあるのだなと芸術の違った面を（感じ方）見た気がします。（茨城県 / 女性 / 33歳）

「これもび展」ギャラリートークの記録—記録ファイルより

◆日立市からいらした年配のご夫婦。一度観られてか



毎回のギャラリートークの記録がファイリングされ、メンバー内で情報を共有します



あるとか、伊庭さんの作品は食虫花のようで観ているほうが食べられてしまいそうとか、現代アートは初心者がおもしろかったのでもた来るとおっしゃっていました。2003年9月（記録者 / 立木）

ギャラリートーク 託児付き



「Living Together is Easy」展の託児付きギャラリートークの様子

小さなお子さんの育児で忙しいお父さん、お母さんにも、ときにはゆっくりと美術鑑賞の時間を持つてもらえたら。「託児付きギャラリートーク」は、そんな想いから始まりました。美術に興味があっても、育児の都合等でなかなか来館の機会を得られない人がいるのではないのでしょうか。そんな方々にも、お子さんを安心できる環境でお預かりしたうえで美術鑑賞を楽しんでもらいたいというのが、このプログラムの主旨です。通常のギャラリートークと同様、いくつかのグループに分かれ、ギャラリートーカー、そして他の参加者の皆さんと共に、自由な対話を通して豊かな美術体験をってもらうことを目的としています。

このプログラムが生まれるきっかけとなったのは、2000年に水戸市教育委員会生涯学習課の提案で開催された「芸術館おしゃべりツアー」でした。小さなお子さんを持つご両親にとつて、静かに楽しむことが求められる美術館はつい遠慮しがちな場所でもあります。そんな方々のために育児ボランティアの協力を得て行われたこの催しは、参加者の皆を始め、多くの方から好評を得ることができました。

そこで現在は、水戸芸術館現代美術センターの各企画展につき1回、「託児付きギャラリートーク」を開催しています。どの参加者も小さなお子さんを持つ身であるため、共通の話題が色々あるなど、通常



おしゃべりグッドのメンバーとともに
(左がギャラリートーカー、右が託児利用者)



託児中の子供たち。託児ボランティアさんと楽しく遊んでいます
写真提供：つなぐNPO「観客の学校」

のギャラリートークとはまた違った連帯感、親しみやすさがあるのも特徴と言えるでしょう。

美術と親しむ暮らし、それは学校教育はもちろん、家庭における日常生活とも深く関わるものだと考えられます。「託児付きギャラリートーク」を通してご両親が美術に親しむ中で、託児サービスを受ける子供たちも、いつか成長して家族で来館してくれることを願っています。かつて託児場で共に過ごしたお子さん同士が、ギャラリーで再会して友達になる……近い将来、そんな事があるかもしれません。

利用者からのメッセージ

❖「託児付き」という言葉につられ、初めてこの企画に参加するまで私にとって現代美術とはよくわからない、つまらないものでした。でも、トーカーの方や他の方という話をし、考えるにつれてとても楽しい欠かすことのできないものへと変わっていきました。ともすれば子育ては制限が多く、自分の興味を広げることが難しくなりがちですが、この企画によって逆に世界を広げることができました。
(水戸市／山田幸恵さん)

3歳と5歳の男の子のお母様

❖毎回楽しみにしています。子どもを預けてのギャラリー鑑賞は、じっくりと観ることができ、トーカーさんの話もよく聞けるので充実した時間です。日曜日ということもあり、多くのご家庭では家族全員で過ごされる方が大半だと思いますが、たまには一人で「芸術時間を」楽しむのはいかがでしょうか。心身ともにリフレッシュできますよ！
(水戸市／酒井万裕子さん／3歳の女の子のお母様)



☆ギャラリートークを楽しむ市民グループ

「おしゃべりグッド」

2000年に行われた企画「芸術館おしゃべりツアー」の受講者を中心に発足したギャラリートークを楽しむ市民のグループ。グループ名は発起人であるサラリーマンの小笠原さんの命名です。

託児付きギャラリートークの日に集まり、お子さんを預けた方たちとともに参加します。はじめてトークに参加するお母さんたちも、作品について自由に自分の言葉で語ることに慣れているメンバーとともに、リラックスした気分で鑑賞することができます。



上下：「ママといくはじめての美術館」参加者
写真提供：つなぐNPO「観客の学校」

☆託児付きレクチャー

「ママといくはじめての美術館」

2003年秋、お子さんと一緒に美術館を楽しむためのヒントが詰まったレクチャー「ママといくはじめての美術館」を開催（講師：中村淳子さん／つなぐNPO「観客の学校」福岡校）。レクチャー終了後、託児会場に子どもたちを迎えに行き、親子で開催中の「こもれび」展を鑑賞しました。トーカーは親子の対話を尊重しながらご案内する役割を担いました。この企画はNPO「子育て応援・ベンギンくらぶ」と共催し、機関誌を通じて育児中の世代にも広くアプローチできました。

学校との連携



教科を超えたギャラリートークの活用

◆ギャラリートーカーの橋さんは中学校の国語の先生です。従来の国語科のイメージを超えて音楽、美術などを取り入れた魅力的な授業をされています。そんな橋さんに対話型ギャラリートークについてひとことお聞きしました。

「国語教育からみたギャラリートークの魅力」
中学生が「え？これが芸術作品なんですか？」とつぶやく作品をもとに、ギャラリートークをすると、どうなるか？ 十中八九お互

いの考えを話し始めます。ギャラリートークが面白いのは「何なんだろう？」という眩きから自然と話が始まることです。国語科学習指導要領の「伝え合う力」を育む「場」としてもギャラリートークは有効で、教師としても、生徒とまなざしを共有できる喜びをもてるのです。ここに気付いた美術科の先生方との「総合的な学習」の時間の共同研究も始まっています。ギャラリートークは全く新しい授業を創るヒントの宝庫だと思えます。(橋明広/水戸市立第四中学校に国語科の先生として勤務)

CACギャラリートーカー

募集・研修



2001年第4期の募集チラシ

◆活動の様子をのぞいてみました 2003年12月～2004年2月

ギャラリートーカー研修会

- 03.12.20 東京・六本木 森美術館への外部研修
- 04.01.10 世田谷美術館ボランティアの方との交流会
[Living Together is Easy] 展勉強会
新年会
- 04.01.24 [Living Together is Easy] 展オープニング
アーティストトーク聴講①
- 04.01.25 アーティストトーク聴講②
担当学芸員への質問会
- 04.02.07 [Living Together is Easy] 展
ウィークエンドギャラリートーク開始 (以後毎週末)
- 04.02.22 視覚障害者のある方とともに展覧会を観る研修会
「ミュージアムアクセスグループ MAR」を招聘
県立盲学校・障害者団体の関係者を招待
ギャラリートーク中間報告会
- 04.02.24 美容師さんのためのギャラリートーク
- 04.02.28 茨城中学・高校PTAギャラリートーク
- 04.02.29 託児つきギャラリートーク

子どもたちの豊かな表現力や感受性を育むために、改めて鑑賞教育が重視され、総合学習の視点からも文化施設と教育機関との積極的な連携に期待が寄せられています。水戸芸術館でも、学校の児童・生徒が来館する際は、可能な限りスタッフとともにギャラリートーカーが対応しています。少人数のグループに分かれ、対話をしながら作品を鑑賞し、会場を巡っていきます。

2001年には水戸市立飯富小学校からの要請で、初めて館外での出張型ギャラリートークを実施。「ようこそ飯富ギャラリーへ」と題されたこの試みは、鑑賞をテーマにした授業を行いたい、という同校の教諭の思いから発案され、同校事務主事の小松牧子さん(ギャラリートーカー)が橋渡し役を担いました。学校側が茨城県立近代美術館から5枚の複製画を借り受け、これらを鑑賞しながら自由に話し合う授業です。水戸芸術館からは4人のボランティアが参加しました。絵に近づいたり遠くから眺めたり、様々なかたちで鑑賞しながらボランティアと児童との間で意見・感想が交わされました。子どもたちにとって通常の授業とはまた違う、新鮮な体験であったようです。彼らが受け身の姿勢ではなく、自分らしい感性を発揮できる体験として美術鑑賞をとらえてくれたことは、一つの成果でした。

CACギャラリートーカーの募集は、過去に4回行っています。募集は不定期で、欠員が多くなり活動が難しくなった時期に行います。半年～1年程度の研修の上、選考を経て採用となります。(*その後も年間を通じて研修会、勉強会、交流会に参加してギャラリートークに必要なスキルを身につけます。

活動の中心である対話式のギャラリートークには簡単な決まりごとの他はマニュアルがなく、話の組み立ては個々に委ねられています。この難しさに加えてさまざまなお客様と接する最前線に立つメンバーと、学芸スタッフとの間ではさまざまなコミュニケーションが欠かせません。最近ではメンバー内のメーリングリストの活用などにより以前より情報の共有がスムーズになってきたものの、学芸スタッフが丁寧に対応できるトーカーの人数は10年前と変わらず25人前後です。機会均等、住民参加という視点からボランティアは数が多いほうがいいという考え方もありますが、しばらくはこの人数でしか実現できない活動の質を追及する方針です。

*CACギャラリートーカー以外のボランティアは選考がありません。



左上:2004年2月、MARを招聘した研修会(上記研修欄参照)
左:2003年4月、「国連少年」展の自主勉強会—原子力関連のお仕事でIAEA(国際原子力機関)に出張されたことがあるメンバーの難さんに国連の組織や展覧会で取り上げられた劣化ウラン弾についての話を聞きました
右:2003年3月、外部研修—東京の美術館・ギャラリーを巡りました



飯富小学校6学年は全部で23名
視聴覚室で授業をしました

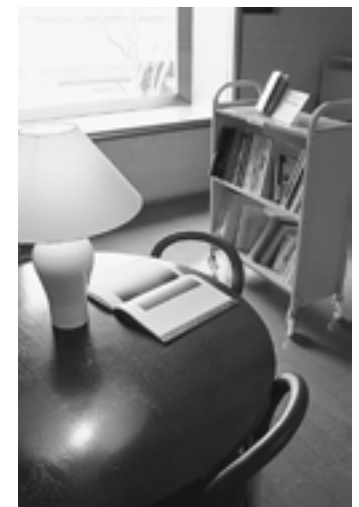


ジャン・フランソワ・ミレーの「春」を鑑賞
「作品をよく見て、見つけたこと感じたことをたくさん話してみよう。」



自主企画 館への提案例

CACギャラリートーカー



エントランスホール2階の資料コーナー



「Tuesday Talk!」のちらし

さまざまな年齢、職業、考え方が出合い、活動できるのがボランティアの醍醐味の一つ。そして美術館にとってもその多様性はアイデアの宝庫であり、財産です。メンバーは館の状況を理解しつつ、柔軟な視点で、「あったらいいな」と思う活動を提案してくれれます。その中から来館者他への波及効果があり、かつ予算、時間、人員などが実現可能だと思われる案について、スタッフは提案者、協力者とともに動いてみることを心がけています。

その一例としては水戸芸術館エントランスホール2階の資料コーナーがあげられます。メンバーの野中千枝子さんから、ギャラリートークの参加者に、以前の展覧会を説明したいからどこかに過去に開催した展覧会のカタログを置いてはどうか、という希望が出されました。話は発展して芸術館全体の資料コーナーを作ろう、ということに。現在は水戸芸術館事務局が管理するコーナーとなっています。

また、加藤真木子さんは2004年に、美容師など週末に休みが取れない方に向けた「Tuesday Talk II」を試みました。美容師の知人がアート好きで、仕事の感性を磨く上でも参考にしていると聞き、多くの美容室の休日である火曜日のギャラリートークを提案しました。「小さなしずくのような試みですが、良い波紋が広がれば嬉しいです」。日常からヒントを得た発想は、ボランティアならではのと言えそうです。



新年会



「カフェ・イン・水戸」展タウン・クルーズ

展示会展示制作



椿昇+室井尚「飛蝗」設置風景



水戸芸術館現代美術センターでは、ギャラリーートカーの他にも、必要に応じた様々な場面でボランティアメンバーを募集しています。それらを総称してプロジェクトボランティアと呼んでいます。展示会の展示制作に関わるボランティアも、そのひとつです。

2001年から2002年にかけて開催された「川俣正 デイリーニュース」展では、近隣の高校生、大学生、専門学校生を中心にボランティアが集まりました。国際的に活動する現代美術作家・川俣正は、本展示会における作品「デイリーニュース」において、ギャラリーの一部を新聞紙の山で埋め尽くす展示を制作しました。日々消費される膨大な情報量や物質性を表現した本作品は、100トン以上の新聞を用いたものです。リサイクル業者から借り受けたこれらの新聞紙は、作品の制作と展示を経た後に返却されました。

重い新聞を運ぶ設営作業は重労働となることも予想されましたが、作家と直接触れ合い、美術制作に関わる貴重な機会にもなることから、美術に興味のある学生を主対象にボランティアを募ることにしました。呼びかけに応え、個人的に参加する学生や、授業を利用して参加した高校生と先生などが集まりました。こうした人々が、作家と共に3日間をかけて新聞の積載作業を行ったのです。展示最終日には、

川俣氏ほか展示会スタッフと、ボランティア数人も加わったの打ち上げパーティを開催。作家と直接語り合える貴重な時間を過ごしました。

また、水戸市内各地に美術作品が展示された「カフェ・イン・水戸」展(2002年)では、作品の設営や監視、広報活動など幅広い分野でボランティアチームを編成。さとうりさによる全長15メートルのバルーンを用いた作品「Working, now (Risa Campaign vol.1)」や、巨大なバットをモチーフにした全長50メートルの作品「飛蝗」(椿昇+室井尚)など、屋外展示を含む各作品とその会場管理などを担当しました。その後、2003年に行われた椿昇の「国連少年」展ではこの巨大バットが再登場し、やはりその設営にボランティアの力が発揮されています。

こうした柔軟な形態によるボランティアの参加は、館にとっても大きな力となっています。館側としても、現代美術の現場を体験することに興味のある方や、社会活動に積極的な人々にとって有意義な体験の提供とすることを目指しています。



「カフェ・イン・水戸」展 徳田憲樹作品「赤い匂い」設置。せっけんをスライスして窓ガラスに貼る作業



展示終了後、宿舎で作家や関係者の話を聞く参加者



「川俣正 デイリーニュース」展展示風景



「これもび展」の設営



展示にワークショップに活躍—ボランティアスタッフの声から

◆ボランティアスタッフになって、一番嬉しいことは、何をやっても「楽しい!」ことです。いろいろな人と出会うのも「楽しい!」ですし、いろいろな企画の一つ一つを、準備、実行する過程に関わることも毎回本当に「楽しい!」です。こんなに「楽しい!」ことをつい最近まで知らなかった事が悔やまれます。芸術館に住みたいなあと思う今日この頃です。(水戸出身/東京在住の山崎佳子さん/20代)

◆水戸芸のスタッフのきめ細かい気配りにいつも感激させられています。今現在のこのみではなく、ワークショップや高校生ウィークに来てくれた人たちの可能性を引き出す手がかりのようなものをうまく作り出しているなあと思っています。地域に生きる子どもたちのためにも、これからも積極的に出前授業などを行ってほしいです。水戸芸を通してこれからもいろいろな生き方の方に出会い、さまざまな考えに触れられたらと思っています。(水戸出身/金沢の大学に在学中の平根美穂さん/20代)

高校生ウィーク

「高校生ウィーク」は、高校生または15才〜18才の来館者を対象とした、入場無料の招待期間。若い世代に向け、より気軽に現代美術に触れてもらうこと、1993年から継続的に開催されてきました。

その期間中には、高校生たちが主役とも言える関連企画も行われます。初期には美術作家によるレクチャーなどが中心でしたが、参加学生たちがより主体的に関わる催しも生まれてきました。2000年の「ポスタープロジェクト」では、近隣3校の高校生たちがコンピュータを使って水戸芸術館のポスターを作成。また2001年、2002年には映像と音楽を組み合わせるコンピュータ・ワークショップを開催し、多くの参加者が集まりました。

こうしたなか、高校生同士、さらに世代の違うボランティアメンバーとの交流も自然と生まれてきます。また、来館者からも興味を示す声があったため、2003年にはワークショップ会場の一角に小さなカフェを併設しました。結果として、高校生、美術作家、地域住民や来館者、ボランティアなど多くの人々の相互交流に活用されたと言えます。

そこで、より開かれた交流の場を若い力を活かして作り出すことを目指し、2004年にはワークショップ会場全体を使った「ゆうかりカフェ」開設が試みられました。その運営・運営には現役高校生や、かつて「高校生ウィーク」の催しに参加した若い世代、また他のボランティアなども加わり、手作り感覚のカフェが登場。地域の方々の協力による照明設備やBGM、ボランティアによる「お針子チーム」でリメイクされた中古家具、司書ボランティアのセレクトによる書籍コーナーなど…。くつろいだ雰囲気の中、互いの話に耳を傾ける学生たちや、展示会の感想を述べ合う来館者などで連日賑わいました。

カフェのスタッフもボランティアによるもので、昨年まで高校生だった参加者が、新たに彼らを招く側として活躍する光景も。店内ではワークショップやレクチャーも開催可能とし、過去の参加メンバーが始めた新プロジェクトや、街の方々の提案を紹介するブースも設けました。

若い感性にとっては、他校の生徒や、普段は接点の少ない異世代の人々との交流で刺激を受けることも多いようです。それは、かつて彼らと同じ高校生だった人々にとっても、同じことが言えるのではないのでしょうか。高校生を館に招くことから始まった「高校生ウィーク」は、彼ら自身の力で新たな広がりを生み出しています。



高校生ウィーク参加者の声

◆私は高2、高3と参加した広報プロジェクトでコンピュータを使ってTシャツやステッカーを作りました。最初イラストレーターというソフトさえ知らなかったのですが、大学・専門学校の方や芸術館の職員の方がやさしく教えてくれたので楽しく作品を完成させることができました！パソコンの技術を学べることもそうですが、人間的に成長でき



お針子ボランティア（→p18）はカフェで使用するエプロンや椅子カバーをつくりました

たことがよかったと思っています。新しい友達ができたり、普段なかなかできない深い話をしたり…。学校という枠のない作業のため、年齢を気にせず話ができ、いろいろな考え方に触れられる環境があったと思います。高校生の時期にそんな場は貴重なのではないでしょうか？（清司祐加さん／大学1年生／東京在住／カフェスタッフとして参加）

◆今年のカフェでうれしかった部分はサロンの役割を果たしているところです。高校1年生のときに初めて高校生ウィークに参加しましたが、私自身もやはりつながりが欲しかったのかなと思います。若い世代の私たちにとって大人と触れ合えるなかなか無い素敵な場所です。大人の言葉というのは想像以上に優しく励ましていることだと思います。（小林理恵さん／大学1年生／水戸在住／カフェスタッフとして参加）



2004 ゆうかりカフェ一角の「日々の針仕事」コーナーでの高校生



2003 高校生ウィークの様子

高校生ウィーク2004

たくさんの方々の協力で実現した2004年の高校生ウィーク。準備を経て、会場のようかりカフェで起こった出来事をレポートします。

2003年 11月

スタッフミーティングを重ね、今年のコネクトと会場イメージが決定

高校生が月に1回水戸芸術館の広場で開催されるフリーマーケットで高校生ウィークの宣伝チラシを配る広報活動を担いました。



2003年 12月

チラシの制作・関係者との打ち合わせが始まる。カフェスタッフ決定

2004年 1月

市内高校へのチラシ発送とあいさつ回り。会場制作開始

展示スタッフが家具のメンテナンスを開始。椅子やテーブルは、近くの閉店したデパートや商店からの放出品。また、過去の展覧会で使用した素材を駆使して会場を構成。「あるものでやる」精神を貫きました。シャンデリアも手作りです。

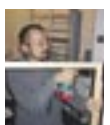


洋服のボタンナーをされているギャラリートーカーの石崎さんが中心となった「お針子ボランティア」を結成。主婦、高校生、ボランティア、アーティストの方などさまざまなメンバーが、残り布を利用してエプロンや椅子カバーなどを丁寧に制作。会場



の雰囲気作りに大貢献です。

近所の画廊にお勧めの益子さんが仕事帰りに応援に駆けつけてくれました。この日はカフェスタッフブースのドアを作っています。



K5 ART WORKSHOPの甲高さん。今年も昨年引き続きプロジェクトの提供者として関わりますが、ご自身が経営するカフェのオーナーとしてもコーヒーメーカーや椅子を会場に提供してくれました。



ボランティアの皆さんからは準備中から会期中、たくさんの差し入れがありました。ありがとうございました。

2004年 2月・3月

高校生ウィークスタート

ようかりカフェがオープン

期間：2月17日(火)～3月21日(日) / 会場：水戸芸術館現代美術ギャラリー内ワークショップルーム / open 15:00～17:30 / closed 月曜日



カフェボランティアスタッフ

高校生ウィークを経験した大学生やワークショップのボランティアを中心に約10名が交代制で毎日会場とお茶の準備、片付けまでを担ってくれました。カフェオープン後に高校生の飛び入りスタッフも登場。「ようかりカフェ」はセルフスタイル、無料でコーヒー、紅茶、緑茶が飲めます。



レギュラーのプログラム

BOOKS



ミュージアムショップで好評のTOBO BAG。バック作家の当房優子さんを招いて小さな作品を作りました。開催日：3月17日(水)

2002年水戸短編映像祭グランプリ受賞作品「テトラポッド・レポート」(監督：富永昌敬) 上映
NPO法人シネマパンチ提供。開催日：3月18日(木)

ライブペインティング
ガールズバンクユニット「K5」のドラマーとしても活躍する多田玲子さんによるライブペインティング。ようかりカフェの壁がエンディングに向けて変化します。開催日：3月19日～21日



街の皆さんからの提案プロジェクト

「エコミット」eoo(エフ+水戸(mio))
高校生・大学生を中心とした環境を考えるグループeoomio(エコミット)は昨年の「高校生ウィーク」に参加した一人の高校生の行動から生まれました。1年間の活動と、期間中開催するデモンストレーション「エコミットレイン」と街にどのような記録を紹介。開催日：3月3日(水)・10日(水)・16日(火)



「三店物語」

水戸芸術館周辺の店舗3店が「日本再発見」というテーマでイベントを同時開催。芸術館を拠点とした回遊性のある街づくりを目指す企画でした。開催日：3月27日(金)～29日(日)



CLUTCH menu 3.10「コミ」について考え行動しよう!

沖縄のアーティストのコミゼロ運動に触発された猪狩直彦さんが、参加者とともにコミの問題について話し合い、行動するための第1歩を踏み出しました。トーク開催日：3月10日(水)

「カラクタ商品店」K5 ART WORKSHOP

カタログ、司書ボランティアさんによる水戸芸術館の蔵書からの選書、ミュージアムショップや学芸スタッフによる持ち寄り、選りすぐり、ノンジャンルの本や雑誌が自由に読めます。

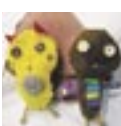
MUSIC

水戸市内のレコードショップに勤める佐藤勝紀さんが高校生ウィークオリジナルBGMを制作。彼が高校生の頃に聞いていた曲と、ポエトリリーディングを集めた音が、会場内で重層的にオンエアされます。



日々の針仕事

置いてある材料から自由に発想膨らませて、(普段はあまりやらない?)針仕事に挑戦できるコーナー。携帯電話ケース、ペンケースなどを作る顔は真剣。何度も来て洋服を作るツワモノも登場しました。



フリーペーパー

たくさん個人、組織からフリーペーパーの提供を受けました。置くとすぐになくなるので、フリーならぬ閲覧コーナーが出現するというジレンマに陥ったコーナー。



カフェの中では日替わりのワークショップやトークショーその他が行われました

「尚さんのスウィーツday」

毎週水曜日はおいしいお菓子が届きます! 那珂町在住の高橋尚美さんによる手作りの焼き菓子です。



「Tuesday Talk」
美容師さんのためのギャラリートークです。街のヘアサロンでアートの話が聞けるかも? 開催日：2月24日(火)

「おとなの生活」

もっおとなの人も、これからおとなになる人たちにも出会ってほしい、さまざまな「おとなゲスト」を迎えるシリーズ。



「お気に入り」をいらなくなったものから生み出そうというプロジェクト。来館者の皆さんから募ったアイデアから商品を作するワークショップを開催。ワークショップ開催日：3月14日(日)



「詩は誰にでも書ける」

詩人風間晶さんによる詩作ワークショップ。居合わせた方たちとの話らいの中で誰もが詩人となる試みです。開催日：3月16日(火)



須藤忠隆さんによるビデオアート

2001年より「高校生ウィーク」でのコンピュータワークショップに参加し、現在は東京で制作活動続ける須藤さんによるオリジナルビデオアートの上映。上映日：3月10日以降随時(イヴェント日以外)

プログラムにないくつろぎ

期間中カフェは時間外も含め、大活躍でした。託児つきトーク終了後のお茶の時間、ボランティアの研修、団体の休憩所として。また芸術館スタッフの作家やプレスとの打ち合わせや、高校の生徒会のミーティングにも。



そして、最終日3月21日の夜は、この1年に美術館を支えてくださった皆さんの交流を目的としたパーティー「芸夜」が行われ、5週間にわたって皆さんをお迎えしたようかりカフェは幕を閉じました。



来年はどんな出会いが待っているでしょうか。皆さんまたお会いしましょう。



「日々の針仕事」スペシャル「tobo」の布あそび」

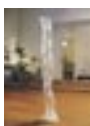


「修復と再生」
アーティスト：もとみやかをる (Living Together in Easy) 展出品作家。日本の伝統的な手法「金つぎ」を使って、参加者の皆さんが持ち寄った「修復したいもの」を再生させていきました。開催日：3月7日(日)



「タワー工作室@高校生ウィーク」

水戸のシンボル、芸術館のタワーを一緒に作りました。講師は森山進吾さん。開催日：3月11日(木)



ワークショップ

「ふたりでみてはじめてわかること」
おとなゲスト：白鳥建一さん(まーていすと)千葉県在住。白鳥さんは視覚障害を持ちながらも美術館にどんどん出かけ、たくさんの人と作品に出会います。何を楽しく美術館に来るのか、参加者の皆さんにも聞いてみました。開催日：3月13日(土)



「確信をもたないことへの自信」

おとなゲスト：藤本均定成さん(作家)笠間市在住。藤本さんは古い大谷石倉庫を壊しながらそこに新しい空間を作り続けます。そこではカテコリーに縛られない原初的なものづくりへの欲求が実現できる場として、これからも皆が集まるとしよう。開催日：3月6日(土)



ワークショップ

❖もうひとつのささえて

博物館実習生

将来、学芸員をはじめアートマネジメントに関わることを目指す大学生が、毎年夏に数名、2週間の博物館実習を履修します。最近では水戸芸術館の展示会を観て育った学生が実習を希望することが多くなり、開館して10年余の歳月がゆるやかに地元の子どもたちに作用してきたことを感じます。カリキュラムの半分は講義、半分は展示やワークショップの現場に入り、学芸員だけでなく多くのスタッフとボランティアが美術館を支えていること、多様な来館者がいることを肌で感じてもらう機会としています。期間が終了してからも、よき理解者として美術館の活動を支えてくれる実習生が少なくありません。



「国連少年」展オープンワークショップ「つくるみらい」



「国連少年」展オープンワークショップ「つくるみらい」

ワークショップ

プロジェクトボランティア

展示会などの開催を通して新しい美術の拠点を指すとともに、人々と現代美術との出会い・交流を作り出すことが、現代美術センターの大きな役割でもあります。そのための重要な活動のひとつに、ワークショップがあります。これは、アーティストらを講師に招き、参加者が主体的に創作活動などを行うものです。幅広い年齢層を対象にしたこれらの参加型プログラムは、アートを楽しみながら理解していくうえで、大きな可能性を持つものと言えるでしょう。これまで、主に館内のワークショップルームを会場に、各展示と連動して積極的に開催されてきました。このワークショップの開催においても、特にたくさんの方の参加者を招くプログラムにおいて、その準備や当日の進行を補助するためにボランティアが参加しています。

最近の例では2002年に行われた「カフェイン・水戸」展において、参加作家・榎野さやかを招いてのワークショップ「ガラスでつくるう」が開催されました。普段は気にとめられない透明な板ガラスを組み合わせることで、各参加者が自分らしい光のかたちを作ろうというプログラムです(対象：小学生以上)。2003年、椿昇の「国連少年」展では、5月5日のこどもの日に合わせたイベントとして、「つくるみらい・かたるみらい」を開催。「つくるみらい」では、ワークショップルームに様々な工作屋台を設置

し、参加者はそれぞれの屋台で地雷についてボランティアから話を聞いたり、平和のためのロボットを考えたり、戦争や平和についての本を読んだり、同じ日に広場に展示されていた「飛蝗」にあわせて折り紙バッタを作るなどの試みを自由に行いました。「かたるみらい」では、アーティスト椿昇が小学4年生以上(大人の参加も可)の参加者と共にギャラリートークを行いました。

同年8月には、この時期に開催された「こもれば展」に合わせ、「夏のワークショップ2003(光の箱)」が行われました(対象：小学生以上)。ここでは、同展の主題でもある「光」について楽しむ小箱を作りました。箱をかざす場所によって、中にとりこまれた光が様々に変化し、鮮やかな色彩を映し出します。講師として招いたアーティスト・松村泰三とともに、ギャラリートーカーや学生など、10数名のボランティアスタッフが参加者への技術指導にあたりました。

こうしたワークショップは、参加者がプログラムを通して自分なりの発見や「気づき」を得ることが重要だと考えられます。ボランティアメンバーは、その手助けのために協力すると同時に、自分たち自身もワークショップの一参加者として関わっているとも言えるでしょう。



フェイス(館内案内)の中島さんは折り紙の達人



ワークショップ「光の箱」

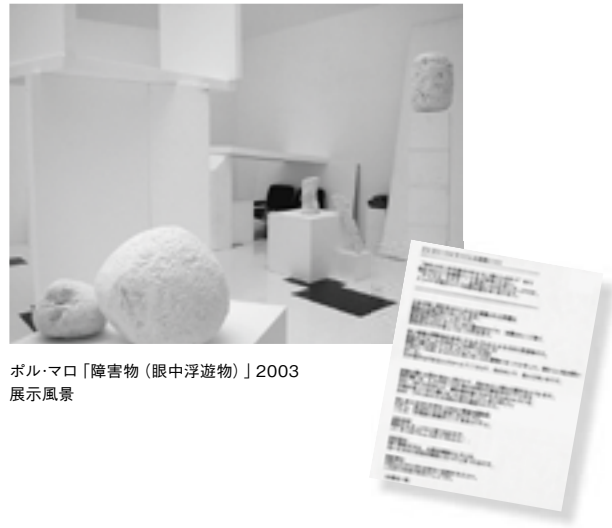
「こもれば展」ボル・マロ作品について

—「ギャラリーライターによる感想ノート」例

“他の人はこの作品をどのように感じたのか？”そう思われたらこの感想ノートをご利用ください。
“ギャラリーライター”は市民によるボランティアです。



天井が空に開け放された小さな隔離された部屋は、無数の太陽が降り注いでいます。部屋は昼光色でいっぱいです。敷き詰められたタイルと白い壁のおかげで、太陽はもっと強く、部屋はますます眩しくなってゆきます。



ボル・マロ「障害物（眼中浮遊物）」2003
展示風景

白い部屋の調度品は浜辺に打ち上げられたさまざまな残留物です。
発泡スチロールの泡のような風化された玉
海底で錆び付いてしまったジュースの缶
子供のころ波にさらわれた青いボールも置物になっていました。懐かしい私の青いボール。
その他のものはなんだかへんてこりんで、光のせいで、皆んな白いのです。

部屋の隅には髪を束ねた男がいて、前のめりに何かを覗き込んでいます。

別の隅には、しゃがみこんだ老人が何かに聞耳を立てています。

また、他には女がいて、腕を組み直しながらガムをかんでいる。

子供が走ってきて線になって出て行ってしまいました。

実は、これらの人たちは私と同じ観客なんです。

男も老人も女も子供もこの白い部屋の調度品

だから、浜辺のごみと並列に並ぶんです。

こんな、不思議な事実がここにあるんですよ。

芸術家は

観客をもキャンバスに取り込みます。

バーチャルでしょうか？ それとも…

芸術家は

物に意味を与え、人間を無機化している。

均一化された状態の物質になってしまったのです。

芸術家は

地球上のそれぞれの存在に価値を与えます。

これほどの愛があるでしょうか。

(川野辺 蝶)



「Living Together is Easy」展でも再びギャラリーライターによるテキストが設置されました

プロジェクトボランティア ギャラリーライター

2003年秋に開催された「こもれば展」の会場では、控えめながらも新しい試みが行われました。ボランティアの「ギャラリーライター」による各作品へのコメントを、自由に手に取れる資料として会場内に公開するというものです。「必要な方はご利用ください」という形で提供されたこのコメント群は、いわば「文字によるギャラリートーク」を目指した試みと言えます。

ギャラリートークは、ギャラリートークと参加者との対話のなかで、豊かな美術鑑賞の時間を過ごしてもらおうことを目指しています。他の人々の視点を知ることが、楽しく美術に触れるきっかけとなり、新たな発見にもつながるでしょう。しかし、初めて会う人と直接コミュニケーションを取ることが苦手な人もいるかもしれません。こうした方々へ向けて、気軽に手に取れる印刷物を使って何かできないか？ギャラリーライターの試みは、こうした思いから生まれたものです。

コメントの作成には、ギャラリートーク、広報ボランティア（[1p.25](#)）のメンバーも参加しました。さらに、過去の展覧会において来場者アンケートに熱心な回答を寄せてくれた方にも、参加依頼をしています。こうして8人のギャラリーライターが、各々の視点で「こもれば展」の作品に対する思いを綴ったものが、会場内に設置されました。

ギャラリートークと同様、ここで語られているのは、個人が作品を前にして得た「解釈」。あるいは「体験」といべきものが中心です。展覧会カタログなどが担う専門情報の提供とは区別するべき、との意見も参考に、興味のある方が自由に手に取れる形で公開されました。来場者アンケートでは、「一人で来ましたが（このテキストがあり）、寂しくありませんでした」など、多くの方から好意的な評価をいただく事ができました。

もちろんこうした試みの実施は、展覧会のテーマや作品群の性質も考慮した上で、その有効性が判断されるべきでしょうが、今後も改善しながら継続してゆく方針です。



「こもれば展」設営中に作品を下見しました

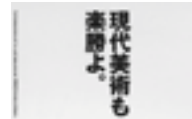
H.T.P.と「おとなのパス」

美術館に何度でも気軽に足を運んでほしいと生まれた2種類の年間パス。1993年より発売を開始した「H.T.P.(ハイティーンパス)」は15歳以上20歳未満の方が対象で年間200名の会員数があります。また、2000年より登場した「おとなのパス」はH.T.P.のユーザー世代の要望から生まれ、年間600人の加入があります。

会員には年間何度でも水戸芸術館現代美術ギャラリーに入場できる他、ダイレクトメールが届きます。また、ボランティアの募集や企画の速報を送ることも多く、リピート率も高いことから、緩やかに美術館を支持してくださっている層としてつながりを感じています。広報ボランティアが関わった「こりこり通信」はこの年間パスの会員に送られます。



H.T.P. (ハイティーンパス)



おとなのパス



「こりこり通信」は現代美術センター広報担当が展覧会の報告や次回展覧会の見どころなどを親しみやすく編集したおたよりです。2003年の「こもれび展」では拡大版を広報ボランティアとともに編集。手話をとりにいたり、水戸芸術館を中心とした光のスポットを地図にしました。

広く利用者に向けて自館の活動を報告していく上で、自らも館の利用者であるボランティアの存在は、館と地域社会の貴重な橋渡し役を果たしてくれる面も大きいと考えられます。

「こりこり通信」は現代美術センター広報担当が展覧会の報告や次回展覧会の見どころなどを親しみやすく編集したおたよりです。2003年の「こもれび展」では拡大版を広報ボランティアとともに編集。手話をとりにいたり、水戸芸術館を中心とした光のスポットを地図にしました。

現代美術センターの活動内容を様々な形で広く告知していく仕事として、広報活動があります。これは公共施設の基本サービスであると同時に、館側から利用者への積極的なコミュニケーションであり、今後の活動にもつながる重要な役割を担っています。広報ボランティアは、展覧会のポスターやチラシなどを、主に市内の商業施設などに配布する活動を行います。「美術に興味はあるけれど、定期的な参加は難しい」、あるいは「展示の裏方の世界にも興味がある」など、参加者の動機も様々です。



近所の商店の店先に貼られたポスター



ポスターとチラシを持って商店街に出かけます

ポスター配布 チラシ・ 広報ボランティア



分類・ラベル貼り・入力作業と根気のいる作業が続きます

蔵書の整理

司書ボランティア

水戸芸術館には年間を通して、国内外の美術館などから様々なカタログや書籍が届き、館内の書架に保存管理されています。これらを学芸員はじめ職員が有効活用できるよう、分類・整理するのも重要な仕事です。この作業を館内スタッフと共に担当するのが、司書ボランティアの役割です。

現代美術が多様であるように、その資料の分類も一筋縄ではいかないところがあります。例えば、同一の作家が絵画、彫刻、音楽など様々な要素を取り入れる作品を制作するケースも珍しくはありません。このような場合も、作家名や分野名から関連資料に確実にアクセスできるようにライブラリーが求められます。初期には手探りで始めたこの作業も、司書資格をもった方からアドバイスを得る機会を経て、現在は日本十進分類法に基づいた配架と使い易いライブラリー作りを目指してデータベース化にも努力を続けています。

一方、館外の人々に向けた催しにおいても、ボランティアが普段の仕事で得た知識や経験を活かして参加しています。「高校生ウィーク」(10/16)におけるカフェ運営では、蔵書からセレクトした書籍による「ブックカフェ」の試みが行われました。また、市内のカフェなどに、展覧会カタログを設置する「Book Traveling Project」など新しい試みもしています。



Book Traveling Project 撮影協力: カフェピッコ

現代美術センター ファンクラブ

の運営



水戸芸術館のホームページには、「水戸芸術館現代美術ファン倶楽部」というコーナーがあります。これは、水戸芸術館に関心を持ち、アートに関する情報交換を行いたい方々へ、インターネットのメーリングリスト運営を中心とした活動の場を提供するものです。この管理・運営も、ボランティアの管理人(現在2名)を中心になされています。

メーリングリスト「現代美術ファン倶楽部」には現在約400名が参加し、「ネットワーク上のアート・カフェ」として、展覧会などの情報交換や、広く美術に関する話題が交わされる場として活用されています。新規参加は電子メールで受け付けており、ホームページ上では過去の発言も公開されています。

電子ネットワーク上でのやりとり以外にも、実際にメンバーが顔を合わせて展覧会に出かけるなどのオフライン・ミーティングも行われてきました。

もともとこの活動は、水戸芸術館の旧「美術教育ボランティア」メンバーが中心となり、N.T.T.が開設したICC(Inter Communication Center)ネット上に集う人々によって結成されたものです。1995年のICC NET閉鎖を機に、この活動は水戸芸術館現代美術センターの公式ホームページ(下記アドレス)へと場所を移すことになりました。しかし、誕生から現在まで、その運営は個々の参加者主体で発展してきた事が特徴と言えるでしょう。

インターネットの普及と共に、個人が運営するホームページやメーリングリストも急増し、アート関連のテーマを扱うものも多く見られます。こうした中、水戸芸術館が「現代美術ファン倶楽部」をサポートしていく意義とは何か。ひとつには、現代美術を扱う施設として、アートと人、アートと地域との結びつきから生まれる広がり期待する気持ちがあります。そして、このテーマを一過性でなく継続的にとらえようとするとき、こうしたネットワークの力に可能性を感じるからでもあります。

www.arttowermito.or.jp/atm-j.html

今後の展望

かかわりの グラブデーション

——水戸芸術館現代美術センターのボランティア活動

森山 純子

☆ひとりからはじまる

2003年の秋、美術館に一本の電話が入りました。内容は開催中の「こもれび展」の関連企画として開催した夏のワークショップ「光の箱」を、ご自分がボランティアをされている県立子ども病院に出前できないか、という趣旨のご相談でした。ギャラリーに展示してあった「光の箱」の美しさに魅せられ、難病と闘っている子どもたちにぜひ体験させたい、とのこと。「光の箱」の作家、松村泰三さんも了解してくださり、夏の企画に参加したボランティアの力と、院長先生をはじめとする病院内のスタッフの理解を得て、無事ワークショップが実現しました。(↑p.29 写真1・2) 具合が悪く口ビィに來れなかつた子どもが、光にかざした作品をベットの上から見て微笑んでいる様子が印象的でした。

これは今まで面識がなかつた來館者が、一時的にボランティアとして活躍された一例です。何度も打ち合わせをし、配慮が必要な病院内で活動について万全のコーディネートをしてくださいました。また、同じ展覧会の期間中、水戸市内の児童館の館長さんが、幼児とその親のグループ100組に、ぜひ美術に触れてほしいと4回にわけて來館の機会を作ってくださいまし

た。(↑p.29 写真3・4 / 下:お母さんの感想) 今まで美術館は自分には無縁だと思っていた方たちが、「来てもいいんですね」と口々におっしゃいます。美術館の活動がまだまだ伝わっていないことを痛感した出来事でした。

水戸芸術館から、このような潜在的な美術館のユーザーに向けてのアプローチの例としては、過去に組織的な働きかけや、初心者にもわかりやすい情報誌の発行などがありました。しかしここ数年は、先にあげたような個人的な理解者を地道に増やすことの「強度」が、その先にいるユーザーに確実につながり広がっていくという実感を持つようになりました。

☆ボランティアであるかどうか

そのように考えるとき、その人がボランティアであるかどうか、という線引きは曖昧になり、美術館に関する第一条件ではなくなります。ギャラリー・トーカーのように(↑p.6) 通常の教育プログラムと密接に関わるために、個人登録が必要なグループもありますし、外部のおしゃべりグッドのメンバーのように(↑p.11) 年4回の活動日に任意で集まる緩やかなつながりでありながら、他の來館者にとって何らかの波及効果

がある、というグループもあります。文化ボランティアのモデル事業として作成される本冊子ですが、ボランティアの肩書きがなくても、すべての來館者や潜在的ユーザーに美術館で他者に関与する可能性があることを提示したいと思います。

☆ボランティア活動をふりかえる

ここまで紹介してきたように、水戸芸術館では現在、美術館活動に興味のある方に対して色々な窓口を設けていますが、そこに至るまでにはさまざまな過程がありました。

現在のギャラリー・トーカーの前身として、1992年に「美術教育ボランティア」を募集しました。当時、対話型のギャラリー・トーカーに特化した活動をボランティアに託す美術館は珍しい存在でしたから、県内はもとより県外からも意欲的、個性的なメンバーが集まり、選挙の結果17名が選ばれました。月1回の定例会は喧々諤々、何時間にもわたり美術とボランティア談義に花が咲き、その中から機関誌「168(いろは)」の発行や、メーリングリストの運営、など次々と活動が生まれ、短期間に多くの成果を得ました。いち早く出入り自由なカフェ的組織を構想するなど、スタッフ

として関わっていた筆者も、メンバーの意識の高さから数多くのことを学びました。

しかし家庭や会社の都合、モチベーションの強弱など個々のメンバーの参加頻度や意識は当然同じではありません。細分化された役割をこなし続ける中で、精神的に消耗するメンバーもありました。結局、担当学芸員の退職もあり、機関誌の発行をやめてみるなど、硬直化してきた活動を解きほぐし、全員卒業、1年活動休止というかたちをとりました。発足以来、ボランティアが主体的に組織を運営できるように心がけてきましたが、このように1998〜2000年当時は館側が方針を建て直さざるを得ない時期になりました。

◆再出発にあたって

方向性を探っていた当時、複数の美術館の教育担当者にボランティア採用の決め手は何ですか？と聞くところを思い出します。確かにボランティアには意見の違う他者と意識的、建設的に議論する態度が必要です。しかしその一方で全て個人の資質の問題とするのではなく、自立した個人が共生できる環境を館側が責任を持って用意することが必要だと考えました。以前の限られたメンバーが次々とたくさん役割を抱えていったことが閉塞感の原因の一つだったのではと思っ

ていたからです。

2001年、第4期の募集を経て、現代美術センターのボランティアは再結成され、多様なコンタクトが可能な美術館へシフトしてきました。組織の新陳代謝という課題は抱えたままですが、貴重な人材の経験値を放出することなく、関わりの多様性と強弱、さまざまなグループの横のつながりの中にその作用を求められるのではないかと思いました。2003年から年1回行っているサポーターのための交流パーティー「芸

夜」もそうした考えのもとに開催しています。

もちろん現在の状況が完成形ではありません。しかし、今までもこれからも美術館自体が時代とともに変化し続ける運動体であるならば、そのときボランティアに関わっているさまざまな人の考え、思いが活動をかたちづくっていくという点は変わらないかもしれません。そしていつの時代も多様な価値観に触れられ、意見が自由に交換できる「場」が私たちが生きる街には必要なのではないのでしょうか。

◆自分で選んでいく関わり方

例えば家庭や仕事を持つ多忙なサラリーマンにボランティア活動を続ける動機を聞いてみると、何より普段なら知り合えない仲間に出会えたこと、という答えが多いことに気がきます。誰もが担っている社会的役割から解放されて、一人称としての「私」と向き合うことができる、それは確かに魅力の一つです。

活動時間が充分にとれないと嘆くメンバーもいるのですが、時間は問題ではありません。細く、長くじっくりととりくむ彼らは、それぞれの日常では第一線の社会人として活躍し、多くの社会矛盾や問題に直面しています。その視点を少しでも反映してもらったことが大切なのです。主婦であっても退職者の方であっても、ひとりひとりのリアルな社会の切り取り方があります。多様なメンバーがいることが、複雑な社会を映す鏡である現代美術を重層的に読み解くヒントになります。

さらには来館者という、より多くの眼を持つことで、非常に大きな広がり期待されます。私たちスタッフもギャラリートークやアンケートで来館者の意見に触れ、影響されることも少なくありません。

います。(*)

例えば、ボランティアと職員が仕事を無償でお願いする／されるといふ関係ではなく、ともに美術館を作っていくもの同士、という立場で提案／賛同／実行という意識の流れが持てれば、お互いに必要以上の気遣いがいらなくなります。水戸芸術館でも「高校生ウィーク」(p.16)のように、多種多様な交流が可能な企画を意識的に行っています。そこで起こってきた高校生たちのネットワークをつくり、美術館での出会いをきっかけに自分たちで環境活動など、行動を起こしている様子には、ささやかな中にも未来への希望を感じることが出来ます。

こうして考えてみると、来館者にはさまざまな選択肢が用意されています。選考がないものなら複数のボランティアを体験することも可能ですし、時には離れる時期もあるかもしれません。ボランティアに限らず、一人で行く／行かない、ギャラリーマップを使う／使わない、順路どおりに歩く／歩かない、カタログを買う／買わない、ワークショップに参加する／しないなど無限です。美術館の来館者が、さまざまな選択肢があることを知った上で、自分のそのときのライフスタイルにあった参加方法を自主的に選ぶことができれば、美術館はより創造的な場所になるでしょう。

◆さいごに——ボランティアは万能か

ここまでのページは、水戸芸術館現代美術センターにおいて、市民に活動を浸透させるために少ない人員と予算とでどこまで豊かな活動ができるのか、という課題に対して動いてきた記録でありました。

今回、ボランティアの皆さんの草の根的活動を多くの方々に紹介できる喜びとともに、実は活動の質と量に対していささかの不安も持っています。現在の教育プログラムの現場は、小さなバランスがどうか保た

れていて、時折申し込まれてくる学校の来館、出張授業、その他総合学習などの対応を、今のところ断ることなくこなしています。

しかし他のワークシヨップなどの事業と並行して増え続ける要請にこたえていくにはもはや仕事量は限界に達しています。もっとさまざまなメディアで告知していききたい反面、もし容量を超える申し込みがあったとしたら、現在努めて行っているぎゅめ細かい対応がどこまでできるのか、というジレンマに悩まされます。新しいボランティアさんを募集養成するには少なくとも1年以上の時間がかかります。活動の広げ方にはバランスを見ながら細心の注意が必要です。

また、ボランティアに託すのはボランティア本人の活動への充実感が、なおかつ公共の利にならなう、つまり利用者へ効果的に波及する内容である、という両輪が揃っているものでしょう。自省を込めてですが、人が足りないところは何でもボランティアに託せばいいのではなく、本来公共施設として人員を配置すべきところと、ボランティアに託すことでより広がり期待できる部分とを見極めて区別していかなくてはなりません。

学芸員による専門性と求心力のある企画展が展示される美術館を、ボランティアをはじめとする市民の利用者がいかに自分らしく使いこなしていくか、この双方向の力が充実するとき、その美術館は「ハコモノ」ではなく魂が入れられ、地域に根付いていくといえるでしょう。

もりやま・じゅんこ

水戸芸術館現代美術センター 教育プログラム担当

*参考文献

博物館学雑誌 第28巻 第2号 「博物館におけるソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)活動とその定義」2003年3月 島村ウィルコックス有香



1 子ども病院 窓辺の「光の箱」



2 コーディネーターをしつこくした尾島さんと子ども



3 じっと絵を見る子どもとお母さん



4 親子連れに大人気だった「木もれ陽プロジェクト」

児童館の親子の感想より

◆青い光の部屋に入り、竹でできた塔を見た時 息子が初めて「青」と発語したのが印象的だった。それまでは 何回教えても「あ・お」と言えなかつた。よっぽど衝撃がはしかったからなのだろうと思う。(水戸市・主婦・36才)

◆以前より興味はありましたが子育て中なので入館自体あきらめていました。今回子どもとともに鑑賞することが出来、とても嬉しかったです。大感激したのはまだ1才半の娘が大喜びで作品を鑑賞していたこと！特に体験型の木もれ陽プロジェクトは楽しかったようです。大きい作品、映像などに様々な体験をさせることの重要性を感じました。(水戸市・主婦)

水戸芸術館現代美術センター資料 第62号

編集 水戸芸術館現代美術センター
(浅井俊裕 高橋瑞木 森山純子 樋口雅子)

執筆 内田伸一 森山純子

資料作成 浅井俊裕 樋口雅子

デザイン 平井夏樹(平井情報デザイン室)

撮影 大谷健二 樋口雅子 森山純子

イラスト 当房優子

表紙 高校生ウィーク「ゆうかりカフェ」
カフェボランティアスタッフ

印刷 株式会社あけぼの印刷社

発行日 2004年3月31日

発行 文化庁

東京都千代田区丸の内2-5-1

水戸芸術館現代美術センター

茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL.029-227-8111

禁無断転載

ISBN 4-943825-64-8



- おもてなし大好き ↓16
- ネットでコミュニケーションしたい ↓26
- 学校が懐かしい ↓10
- 芸術館の活動を広めたい ↓25
- 現代美術をもっと知りたい ↓11
- 細かい作業が好き ↓20・25
- 作家と会いたい ↓6・14・20・22
- 作品について語りたい ↓6
- 作品作りを手伝いたい ↓14・16・20
- 子どもと触れ合いたい ↓6・8・10
- 実は評論家に憧れている ↓22
- 色々な人とお話することが好き ↓6・16・25
- 整理整頓が好き ↓24
- 体を動かしたい ↓14・20
- 体力には自信がある ↓14・20・25
- 地道な作業は誰にも負けない ↓24・25
- 物心ついたところからコンピュータと戯れていた ↓26
- 文章を書きたい ↓22
- 本に触れたい ↓24
- 本を紹介したい ↓24





ポランティアの本

水戸芸術館現代美術センター 2004

